れてしまうということを痛感させられた。そして結局最後に頼ることができるのは、社会に存在する常識や、書物に書かれた知識ではなく、自分の心で感じ、考え、信じて下した決断だけであるということを知った、初めての体験だった。

アフガニスタンの子どもと

自分だけを信じての転身

最後に信じられるのは自分の決断――そうであるならば、自分の心で感じ、自分で決断できる力を少しでもつけていこう、という思いは、その後の大学生活、社会人生活を通してどんどん強くなっていった。

多くの貴重な出会いに恵まれた大学時代。世の中には本当にさまざまな生き方があり、どれをとって最高ということはできないということを実感した。

大学を卒業してすぐに入った経営コンサルティング会社では、「常識を常に疑え」「異論がある時には相手が誰であろうが主張しろ」「自己統治力をつけろ」と、人に流されたり圧力に屈したりすることなく自己を確立することを繰り返し叩き込まれた。

ビジネスの最前線で、プロフェッショナルとはどうあるべきかを一から教えてもらった会社を去ることにしたのは、昨年の春だった。職場は常に学びの連続であったが、よりダイレクトに人に幸せを届けられる仕事がしたい、という気持ちが常にあり、手を抜かずに、全力でぶつかっていくならば、自分がより納得できることをしていた方がいいと信じて、タリバン政権崩壊後のアフガニスタンでの人道支援の職に就いた。

そして今、アフガニスタンで

アフガニスタンに来て驚かされるのは、人道支援が国の一大産業となっている事実である。人道支援によってこの国につぎこまれる金額は、国家予算をはるかに凌いでいる。民主主義の確立、市場経済の整備、適切な政府介入という国家の基盤構築が何よりも優先されるべき復興期にもたらされる異常な規模の人道支援は、復興そのものを脆弱にしているのではないかという疑念が頭をよぎることすらある。

「人道支援」と一般に呼ばれる領域は、批判や疑念の対象となりにくい、一種聖域的な要素を持つ。そんな聖域の中で、あるべきモラルを築き、維持するのは容易なことではない。しかし、この国のために本当に必要なことは何なのかを自ら問い、時には自己矛盾と対峙しながらも真実を追求する努力を続けていきたいと思う。

十代の多感な時期をUWCで過ごし、自ら思考することの大切さを知ったことは、私の原点となっている。留学生活を支えていただいた日本経団連の方々、そして心配をかけ続けた家族に深く感謝するとともに、今後も日本の高校生がUWCで大きくはばたいてくれることを祈っている。

自ら決断するということ

坪内　南（つぼうち　みなみ）

特定非営利活動法人 難民を助ける会
アフガニスタン・カブール事務所駐在コーディネーター

カナダ・リドリー・カレッジからUWCピアソン・カレッジに留学（カナダ、一九九四年～九六年）。二〇〇〇年慶應義塾大学総合政策学部卒業。マッキンゼー・アンド・カンパニーを経て、二〇〇二年四月より現職。

●㈳ユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名以上の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三七〇名以上の卒業生を輩出している。

とにかく外の世界に出て行きたかった私

母が幼い頃の私の話をすると、いつも「一人で何でもやりたがる子どもだった」と言う。おむつがはずれない頃に一人で八百屋におつかいに行くと言い出してきかなかったり、幼稚園を途中で抜け出して先生を真っ青にさせたこともあったという。外の世界に限りない好奇心を持ち、突拍子もない行動ばかり起こす子どもだったらしい。そんな私だったから、中学校を中退してカナダに留学すると言い出した時、両親は最初猛反対したが、最後にはこれ以上反対しても無駄だと思ったらしく、一年だけという条件で留学を許してくれた。

当時、一四歳。それまで外国に住んだことがあったわけでもなく、英語もできない状態でカナダに渡り、結局両親との約束に反して高校卒業までの四年間を過ごした。休暇を日本で過ごした後、またカナダに戻る私を成田空港で見送るたびに、心配と寂しさで母が涙をこぼす話を後で姉に聞かされるとさすがに胸が痛んだが、日本の画一的な教育に嫌気がさしていたこともあり、日本に帰ろうとは決して思わない親不孝な娘だった。

「主流」や「常識」の存在しない世界

UWCピアソン・カレッジに通ったのは、四年間にわたる留学生活の後半二年間である。したがって、カレッジ入学時点においては、すでに単身留学三年目だったわけだが、カレッジでの生活は、新鮮な驚きの連続だった。世界七〇カ国以上から生徒が集まるというまさに地球儀をひっくり返したような環境で、それぞれが異なるということがあたりまえという事実を目の当たりにし、自分とは何なのか、自分の信念とは何なのか、大いに悩んだ。たとえば、当時中東和平が世界の関心事であったが、クラスメイトのイスラエル人、パレスチナ人、そしてさまざまな政治や宗教を背景に持った学生たちがそれぞれに意見を持っていて、多数派に支えられる正義というものが存在しなかった。それまで自分の中で培われた常識や主流とされていたことが、自分と異なる文化やバックグラウンドを持った人にとっては非常識であったり反主流になることがあり、主流というものが存在しない状況では、自然に、自分の考えを明確に持っていないと、さまざまな意見にふりまわさ